

検討会（第 1 回）における各委員からの主な発言内容

○ 超高齢社会における課題と方向性

1. 取り組むべき課題

(1) 高齢社会の在り方の変化

< 主な意見 >

- ・ 人口縮減社会に入って、世帯数の減少、家族の変化、ライフサイクルの変化、テクノロジーの変化による働き方、経済基盤などの生活環境の変化があった。（園田委員）
- ・ それぞれの立場で自分は生きているということの尊厳を感じられるような視点が重要。（働きたい人は働けるが、働きたくない人や働けない人は働かなくても十分に生きている価値を認めてもらえることが重要。）（香山委員）
- ・ 年齢で切って、その方に対する福祉だとか社会的な対策を考えるというのは実現が難しい。（香山委員）
- ・ 社会が変わったことに対する認識が追いついていないことが問題。意識改革を行っていくべき。（関委員）
- ・ 誰を支える側ととらえて、誰が支えられる側ととらえるかによって負担感も全然変わってくる。（関委員）
- ・ 自分で頑張れる人はできるだけ頑張った方がいい。家族、親族が力を合わせて自分の可能性を最後まで追求するという「自己力の拡大」と「社会の下支え」が必要。その中間を支えるところが弱く、「地域力」や「仲間力」を高めることが重要。（園田委員）

団塊の世代への期待

< 主な意見 >

- ・ 団塊の世代はものを言う市民。方向性が示されれば、その方向に対して議論もするが、その方向に向かっていくだけの力がある。（森委員）
- ・ 団塊の世代に期待したいのは、社会貢献とか、心の支え合いにつながる働き方といった、違う働き方、多様な働き方。つまり若いうちは所得のために主に働くとしても、65 歳を過ぎたら自己実現だとか、社会のために働くという部分が増えてもいいのでは。団塊の世代がもっと多様な働き方をしてくれたならば、働きすぎの若年・中年男性もあまり働かなく

て済むという社会になるのではないか。(関委員)

- ・ 東日本大震災は、“大人の担う役割と責務”を考えさせられた。今、大人がしなくてはならないことは、日本という社会の親として生きる姿勢を見せるということ。「相互扶助」の精神の強さを次世代に伝える。(弘兼委員)
- ・ 団塊の世代が勇気ある消費をして、経済を活性化させなくては、日本は元気のない国になってしまう。(弘兼委員)

年齢による「高齢者」の捉え方の変化について

<主な意見>

- ・ わずか半世紀の間に寿命が 1.5 倍になり、人生の後半の部分が 3 倍近くになったので、高齢者については、例えば、年金受給前の成熟期、年金中心かつ時間にゆとりのある引退期、要介護や看取りも含む老後期の課題についてどのように考えるか。(園田委員)
- ・ 高齢者といってもあまりに個人差があり、70 歳とか 75 歳といった年齢でその方の状況、特に心理的な状況などを推し量ることはできない。自己実現の欲求まで満たさないと生きている価値がないとされている方たちも大勢おり、高齢者の方たちもその年代のグループに入りつつある。(香山委員)
- ・ 全く個人それぞれに合わせたというのは難しいが、ある種、オーダーメイドのような社会対策というのが必要。(香山委員)
- ・ 高齢者は 65 歳以上という認識を意識改革しないといけない。(関委員)

(2)働く意欲、NPO 活動等に参加する意欲のある高齢者への対応の遅れ

<主な意見>

- ・ 働き方にも多様な働き方、生活の仕方にも多様な生活の仕方ができる柔軟なライフスタイルを可能とする社会が必要。(関委員)

(3)格差の拡大に伴う支える仕組みに対する不安感の増加

世代間格差の問題

<主な意見>

- ・ 今は 40 年間働いて 20 年間支えられる形の年金制度の設計になっている。個人の人生で考えても 3 分の 2 働いて、残りの 3 分の 1 を働かずに生活をしようと思ったら相当貯蓄をしなければいけない。戦後の人口構成をベースに設定された支給開始年齢を維持したままで、支える側と支えら

れる側の比率はいいのか。(関委員)

- ・ 人口構成に鑑みると、70 歳、さらには 75 歳なども支える側にまわらないと、社会のバランスは保てない時代になっている。(関委員)
- ・ お金の面だけではなく、心の支え合いというのが大事な要素。(関委員)

世代内格差の問題

<主な意見>

- ・ 高齢期における格差の拡大。(関委員、森委員)
- ・ 世代間の格差のみならず、世代内の同じ世代の中での格差をなくす、あるいは連帯を、つなげるようなそういう仕掛けづくりが必要。(森委員)

支えられる高齢者を支える者に対する支援の不足

<主な意見>

- ・ 福祉の最前線におられる方たちの疲弊が非常に大変になっているのを感じている。支える側を支える体制も必要。(香山委員)

(4)地域のつながりの希薄化、高齢者の社会的孤立化

<主な意見>

- ・ 高度経済成長をする中で地域社会が崩壊。(森委員)
- ・ 地域にとっての生活するインフラもなくなってきたというのが1つの大きな問題。地域社会全体の地縁というものがある意味ではなくなってきた。それを復活させるという視点が大事。(森委員)
- ・ 互助という視点がどちらかというところなくなっている。互助を地縁というところでいかに取り戻すか。(森委員)
- ・ 家族が変わり、それに代わるものとして、コミュニティへの期待がある。(園田委員)

都市における高齢化の問題

<主な意見>

- ・ 社縁がなくなるなかで、特に男性社会においては自分の居場所がなくなってきたというのが現実ではないか。(森委員)
- ・ こちらから御用聞きに行くようなアウトリーチ型支援が必要。こちらからいろいろ出て行って、いろいろな話を聞く、アドバイスをするという役割の人も、高齢者支援でも必要。(香山委員)

(5)高齡期への準備不足

<主な意見>

- ・ 休み休み働くというような、家庭生活と両立できるような働き方が前提。
(関委員)

2.今後の方向性

<主な意見>

- ・ 市場メカニズムを通じた自助、あるいはコミュニティを通じた互助を併せながら、尊厳のある高齡社会を作っていく報告で大綱をまとめていてはどうか。(清家座長)

(1)高齡者が意欲と能力に応じて活躍できる環境づくり

- 高齡者の「居場所と出番」の確保 -

<主な意見>

- ・ 自分が人生で培ってきたことを次世代に伝えるのも団塊世代の一つの役目(弘兼委員)

意欲と能力を発揮できる働き方への対応

<主な意見>

- ・ 65 歳を過ぎたら自己実現、社会のために働くという部分が増えてもいいのでは。(関委員)
- ・ 「新しい公共」を含めた、コミュニティ・ビジネスも含めたものを地域の中で作り出していくということが大事。かつての社縁を、例えばコミュニティ・ビジネスなどを通じて地域の中で作り出していくことが大事。(森委員)
- ・ 有償ボランティアの提案。(弘兼委員)
- ・ 有償ボランティアというよりも、男性をメインにするのであれば、むしろ社会的起業をリタイアした時ぐらいから始め、リスクをとってもらおうという、仕掛けの方が面白いのではないか。(園田委員)

長期化する働き方への対応

<主な意見>

- ・ 高齡になっても働けるためには、休み休み働くというような、男性も女性も家庭生活と両立できる働き方が前提。たとえば、5年に1回は半年間ぐらい全員が休める制度を作り、その間は普通に遊んでも、ボランテ

ィアをしても、自己啓発をしてもいいこととする。いろいろな形で自分の多様な生き方、１つただ今の仕事をしているということではない生き方を若いうちからしていればより長く働くこともできるのではないか。
(関委員)

(2)高齢者の「安心な暮らし」を実現する環境の整備

- 高齢者の孤立の防止 -

老後の安心を確保するための社会保障制度

< 主な意見 >

- ・ 最後の 10 年は、生活や介護・医療について心配せず、安心して生活ができる社会設計の視点も重要。(関委員)
- ・ ある一定年齢以上の人については、それなりの保障がある社会という方がよいのではないか。(関委員)

地域における「互助」の再生・コミュニティの構築

< 主な意見 >

- ・ 自分のことは自分でし、かつ周囲と孤立しない生き方をする。(弘兼委員)
- ・ 地縁を通じて互助を取り戻していく必要がある。(森委員)
- ・ 身近な生活環境の中でさまざまな地域資源とか、人的な資源を活用して、そこがきちっとした循環をできる。そういう社会がこれからの私たちの設計図としてどうかという提案 (園田委員)
- ・ 現在、その地域にあるものをもっと組み合わせでコミュニティにしてみようという発想があったらいいのではないか。たとえば、毎日一回は一緒に食事のできる食堂との包括契約、電話一本で電球を交換してくれる電気やさんとの包括契約などである。(関委員)

高齢者が安心して活躍できる環境整備

< 主な意見 >

- ・ 必要としているいろいろなケアが一気に受けられるという拠点が必要。地域包括支援センターがある種、それに似た役割を果たしているか。(香山委員)
- ・ 建物単位の考え方から脱却し、地域福祉居住に介護や医療が組み込まれるコンソーシアムが必要ではないか。これにより「福祉と経済が循環」する地域が構築できるのではないか。(園田委員)

(3)健康な心身づくりなど高齢期への備え

- 現役時代からの高齢期への備え -

< 主な意見 >

- ・ 現役を離れて、そこから自分という個人になったときに、どんな老人になっているか、定年前から想像しておくのも大切。(弘兼委員)
- ・ 自分の身の回りにも、別の社会はちゃんと存在するという。(弘兼委員)
- ・ 生涯学習のススメ。(弘兼委員)

(その他)

- ・ 政府の広報、例えばテレビだとかネットを使って、制度がどうなっているかということをうまくわかりやすく宣伝していく方策にもっと力を割いていてもいいのでは。(関委員)